やっと呼吸が整ったようだ。

ネックとノクシは、背筋の部から伝播したそれらを前に押然とした。

新手。

いつもの冷静なネックとは、全て破壊に無視の手にも、迅速に対的の策を練ることは、ノクシを落ち着かせ、隣を回転させ、行動を起こすべく再び集中しなければ。

だが、ネオずのネックを動けなかった。

邪眼が、広いた。

おかしい、どうして――電れて当然の疑問は、唯の奥につかえて出ない。

このフィルスト大陸において、邪眼とは、誠多に出くわすものではない。

――確かにそうだったはずだ。

猿のような邪眼が、通常の猿より細伯も大きくまるで人間のようだったが、見まごうことはないだろう。全身の毛を逆立てるその激高の姿から、高い霊のようなものだ。

そのお方には、孔雀のような角が長く重れた尾を揺らしながら、大きな羽を一定の リズムで動かしている。ぬらりと左の鳴は、まりふり、ぶるりと左の鳴は、まりふり、ぶるりと動いている。

そして後方には

「おいあれ……」

ネックとノクシに引れるはずがない。

「ほんとだ……」

ノクシとノクシに並れるはずがない。

「確か、マーデル・ブラックにいたっていうアレ」

「手前けが必要かな？　少年」

ネックとノクシは声がした方向を振り返る。

「あんたらは……」

声のまは、一昨日「マーデル・ブラック」の広場の一角で遠具の叩き売りをしていた、茶髪を三つ編みにしたランゴートの男――アルフルドであった。

アルフルドの後ろには大きな荷を引かたジョシュアがいたアルフルド秋段ですよ！」

ノクシはジョシュアの勢いに怯みながら、

「な、なんであんたらがここにいんだよ」

しかし、その質問は邪眼の咆哮によって打ち消される。

猿の邪眼がノンがめけて突進してきた。

ノクシは邪眼の爪が宝を切ることで直前に身体を回転させて交わした。

「あぶねえ！」

ノクシは左手で脱を脱ぶと、邪の手を刺すかを思う。

「手助けったって、何をやこんだけ苦戦してんだ。あんたらで何とかなる相手でもねえだろ」

アルフルドは即座に、

「この私なら問題ない」

と言い切った。

間近に邪眼がいるにも関わらず、その場から歩っも動くことはない。

「すげえ自信だな。どうするよネック？」

ネックはノクシからの言葉を待ちずとも考えていた。突然現れた素性を知らない自称研究者のコトを無条件で信用してしまっていいのか、だがこうも考えることはできる。今目の前にいる巨から存在を対象することが初運の一歩になるとも。今度は孔雀者の邪眼がネックを目掛けて放ちに出てきたのかもしれない。ネックは邪眼に近くにあった木箱を蹴りつけて邪眼の道路を塞いだ。

ネックはもう一つ考えていた。アリーベで出くわした邪眼よりも、今目近くにた邪眼は明らかに力が強くなっている。このまま動れられると全員の体力が底を尽きる可能性もある。そうなれば困の人命に対するリアムのケノアに被害が及ぶかもしれない。

それならー。

「手伝ってくれ」

そう言おうとする時なかった。

アルフルドはニヤリと笑い、

「ふむ、時間をかけるのは私の主義ではなくてね。迅速かつ、丁寧に、それでいて美しいこうではないか」

「あいつ人何を言ってるんだ？」

「一発で仕留めろってことだろ」

「よう分かるな」

ネックはアルフルドと協力体制をとることに決めた。しかしこっちではムが多すぎる。間の悪いことまれればはいやが、ここから街の外に出さまでは邪魔がありすぎる。

「アルフルド、邪眼を仕留める前に、ちょっと、時間をかせぐ。ノクシ！」

アルフルドはネックの意図を瞬時に理解したようで感心していた。

「なるほど、市内の人を巻き込まないように、ってことだな」

ネックは邪眼から目を外さないままで

「ああ」

とだけ言えた。

アルフルドはシャツの襟を正した。

「決は出せるかね？」

「決？　出せるけど」

「良いだろう。私が先回りをするから迫ってくるといい。動いたら射線上に邪眼を置いて私を狙うんだ。最大火力で！」

「私を狙う？　最大火力って、丸焦げになっちゃうんだ」

このノンクの疑問にはネックも同感だった。

ネックやノクシの魔力を見詰っているのか、あるいは研究開発品で使うのだろうか。

「青髪の少年、君も手を抜くな」

アルフルドがネックに釘を刺した。

この人から不安の文字は感じられない。

「ジョシュア君はここで大事な研究開発品を見ていてくれたまえ。万が一、ネズミ共にたっぷり思い知らせならいのでね」

「はい！　おまかせください！」

ふふ、と、猿の邪眼が手近に落ちていた木箱の破片を投げた。

アルフルドは大きなそれを右手で、浅を払うようにしてそれを受ける。

猿の邪眼が咆哮し、地を踏み鳴らん勢いで跳った。

それを引き金に、他二頭の邪眼も一行に向かって動き出す。

「行くぞ！」

アルフルドが一目散に走り出す。とネックとノクシ、猿の邪眼が手近に落ちていた木箱の破片を投げた。

アルフルドは大きなそれを右手で、浅を払うようにしてそれを受ける。

猿の邪眼が咆哮し、地を踏み鳴らん勢いで跳った。

それを引き金に、他二頭の邪眼も一行に向かって動き出す。

「行くぞ！」

アルフルドが一目散に走り出す。とネックとノクシ、猿の邪眼が手近に落ちていた木箱の破片を投げた。

アルフルドは大きなそれを右手で、浅を払うようにしてそれを受ける。

猿の邪眼が咆哮し、地を踏み鳴らん勢いで跳った。

それを引き金に、他二頭の邪眼も一行に向かって動き出す。

「行くぞ！」

アルフルドが一目散に走り出す。

「本当に大丈夫なのか？」

「やるしかねえだろ」

アルフルドが合図をした。邪眼、ノクシは眼り向いて腰を深く落と、地面を踏ん両足につっと力を溜め、同手のひらを突き出して、

「うらあああああああ！」

アルフルドの眼前に迫っていた孔雀の邪眼へ向かって、最大魔力の魔法――火炎放の魔法を放った。ネックもノクシに続いて手のひらから火炎を放った。

轟音を上げながら、ノクシの両手のひらから先ほどの火炎よりも太く、ノクシの、ネックの、ノクシの、ネックの、火炎は先頭のアルフルドも包み込んでいく。

ネックは大きく息を吸い込んだ。

そして、ボケットから砂時計を取り出すと砂運まりを上に向ける。

「……！」

瞬間。

この世界から、音が消えた。